

あ と が き

昭和58年4月、わが城西大学女子短期大学部は、城西大学発展の歴史に輝かしい一頁を飾るべく新設された。

発足当初は、教育に学生指導に、その他諸々の難問題を抱えることは当然である。その多忙のさ中であっても、本学部教員の研究の熱意は、いささかも衰微することはなかった。これに相応ずるかのごとく、金勝副学長は、本短期大学部に研究紀要の発刊を提唱した。6月のことである。急拠、紀要委員会が設けられた。

しかし、言うは易しく行方は難い。まず、開設初年度から大学当局が果して紀要発刊の予算措置を講ずるかどうかも問題である。また、たとえ紀要を発刊するにせよ、その体をなすに足る論文の本数が短期間に得られるかどうか。

幸いにして、大学当局の配慮で紀要発行に必要な予算は付けられたが、これは理事者側が教員の研究に寄せる期待の表われでもあろう。その後、委員会を開くこと数度、計画を練り、7月末の教授会において、紀要原稿募集要項の発表までにこぎつけることができた。しかし、限られた刻限の中で、果して何点の執筆申込みがあるか、編集委員一同、内心案ずるに余りあるものがあった。

10月。その心配は杞憂に終わった。集った原稿は10数編にもおよび、その一部は次号掲載の交渉をするほどであった。渡辺学長、金勝副学長からもそれぞれ巻頭を飾る玉稿を頂戴した。本紀要の刊行は、まさに、大学あげての協力の賜物と、委員一同感謝する次第である。

今、このわが城西大学のけやき台に一本の若木が芽生えた。それは、本女子短期大学部の誕生であると同時に、それを支える研究陣の成果を集めた紀要それ自身でもあると、いささか自負するものである。いつの日か、その若木は大樹に至り、葉繁り、さらに若木となる種子をまた大地におろすことであろう。

本紀要発刊までの経緯の一端を記して、編集後記とする。

昭和59年2月1日

紀要委員 駒 崎 勉